

スミスのステュアート信用論批判

新 村 聡

目 次

- 1 はじめに
- 2 ジェームズ・ステュアートの信用論
- 3 エア銀行の倒産とスミスのステュアート信用論への批判
- 4 むすび

1 はじめに

アダム・スミスが『国富論』の中でジェームズ・ステュアートの名前に一度も言及していないにもかかわらず、その存在を強く意識していたことはよく知られている。1772年9月3日のウィリアム・パルトニー宛の手紙で、スミスは次のように述べている。

「サー・ジェームズ・ステュアートの本について、私はあなたと同意見です。それに一度も言及していませんが、同書の中の誤った諸原理は、私の本の中ですべて明確に論駁されていると自負しています。」(Corr., 132)

ここに言及されている「ステュアートの本」とは1767年に刊行された『経済の原理』である。ではスミスがその中に見出した「誤った諸原理」とはいったい何であったのだろうか。『アダム・スミス伝』の著者I.S.ロスは、二つの可能性を指摘している。一つは、『誤った諸原理』とはおそらく重商主義的諸観念のことであった(Ross [1995], 訳277ページ)という可能性である。もう一つの可能性について、ロスは、「スミスはとくに『原理』第4編の銀行業に関するステュアートの「諸原理」のことを指していたと考えるこ

ともできよう」(*Ibid.*)と述べている。この解釈は、パルトニーへの手紙が書かれた前後の状況を考えると、十分に成り立つように思われる。

スミスは、1772年頃までに『国富論』の草稿をほぼ書き終えていた。ところが72年のスコットランドにおける金融恐慌とりわけエア銀行の倒産は、スミスに信用論の原稿を大幅に書き直すことを迫ったのである。69年11月6日に営業を開始したエア銀行は、72年6月に始まった金融恐慌の中で、6月25日に支払いを停止した。その直後の6月27日に、ヒュームはスミスに宛てた手紙で、金融恐慌の深刻な状況を「あいつぐ倒産、信用の全般的喪失、および果てしのない猜疑心」と伝え、次のように述べた。「これらの事件は、あなたの理論にある程度影響を及ぼすものではありませんか。それとも、あなたの理論によっていくつかの章を修正することになるのでしょうか。」(Hume [1932], p. 264)

ヒュームがこのように述べたのは、銀行制度と銀行券の意義について慎重なヒュームと楽観的なスミスとの間にかねてから意見の対立があったからである。ヒュームは、銀行券に対する当初の厳しい評価をしないで和らげつつあったが、なお過剰発行の危険性を危惧していた (Cf. 竹本 [1990a] pp. 97-98, [1990b] p. 34)。これに対してスミスは、銀行券の意義を高く評価するとともに、銀行券の過剰発行による金融恐慌の発生は、兌換制度の厳格な実施と銀行の自由競争によって回避できるという楽観的な見通しを抱いていたのである。だからこそヒュームは、72年の金融恐慌が、銀行券に対して自分の抱いていた懸念を確認するとともに、スミスの楽観的な信用論に対する強力な反証になりうるのではないかとスミスに問題を投げかけたのである。

スミスにとって、エア銀行の倒産はたんなる理論的問題にとどまらなかった。スミスが旅行付き添い教師をしたバックルー公がエア銀行の無限責任の株主となっており、倒産後の債務処理について相談を受けたからである。スミスは、最初に言及した9月3日のパルトニー宛の手紙の中で「社会の災難」について触れ、「小生ときわめて関係の深い友人のなかには、それに深く

巻き込まれた方もおられます。そのために小生は、かれらを救う最上の方法を求めて、すっかり気を奪われておりました」と語っている。

この手紙でスミスは『国富論』の刊行が遅れる可能性についても言及し、その理由として「娯楽もなしに一つのことばかり考え込んでいることからくる不健康」と「さきに申し上げたような余計な仕事に妨げられたりすること」の2点をあげている。おそらく、「一つのことばかり考え込んでいる」とはエア銀行が倒産に至った原因や金融恐慌の再発防止策について熟考したことを、また「余計な仕事」とはエア銀行倒産後の債務処理へのかかわりを指すのであろう。エア銀行の倒産を予見することもまた金融恐慌の発生を防止する有効な対策を提起することもできなかったスミスの従来の理論は大幅に改訂される必要があったのである。そしてスミスは、信用論の原稿の改訂作業をこの時点までにほぼ終えていたらしい。というのは、同じパルトニー宛の手紙で、スミスは「あなたがお勧めになった問題のあらゆる部分を十分かつ明確に論じた」と伝えているからである。ヒュームだけでなくおそらくパルトニーも、72年恐慌の理論的検討をスミスに勧めたのであろう。

そしてそのあとに、冒頭で引用したようなスミスのステュアートに対する言及が登場する。このように見てくると、スミスがステュアートの「誤った諸原理」は「明確に反駁されている」と語ったときに、ステュアートの信用論を念頭に置いていたのかもしれないというロスの推測は十分成り立ちうるように思われる。

それだけではない。スミスがエア銀行倒産について検討しながらステュアートの信用論を批判するに至ったのは、後述するように、1769年に創業したエア銀行の営業政策が、その2年前に刊行されたステュアートの『経済の原理』から大きな理論的影響を受けていたとスミスが考えたためであったように思われる。それゆえ、エア銀行の倒産の原因を理論的に解明することは、その破綻を予見も防止もできなかったスミス自身の信用論への自己批判とともに、倒産の一原因になったかもしれないステュアート信用論に対する

批判を必然的に含むことになったのである。

以下では、第2節でステュアートの信用論について検討したあと、第3節で、スミスがエア銀行の倒産原因の解明を通じてステュアートの信用論をどのように批判したかを明らかにしたい。

2 ジェームズ・ステュアートの信用論

ジェームズ・ステュアートは、『経済の原理』第4編第2部で、銀行に関する諸原理を考察している。かれは、銀行を、兌換銀行券を発行する「流通銀行」と、預金の振替だけを行う「預金銀行」とに分類した。また銀行が基礎をおく信用として、私的信用、商業信用、公的信用の三つを区別している。

ステュアートがもっとも重視するのは、「私的信用に基づく流通銀行」つまり私的な担保に基づいて銀行券を発行する銀行である。この担保には銀行自身の創業資本も含まれるが、より重視されるのは債務者が提供する動産や不動産とりわけ土地である。したがって「私的信用に基づく流通銀行」は土地担保発券銀行にはほぼ等しい。これに対して「商業信用に基づく流通銀行」は、担保に基づく貸付を行わずに為替手形の割引だけを行う銀行であり、イングランド銀行がその典型とされている。ステュアートは、スコットランドに「私的信用に基づく流通銀行」つまり土地担保発券銀行が必要であることを力説した。

ステュアートが、「流通銀行に関する全理論」の中で「とりわけ複雑で、しかも同時にもっとも重要な問題である」（Ⅲ 214/訳268）として詳細に論じたのは、海外への金銀支払いのために銀行へ兌換請求が殺到したときに銀行がどのように対処するべきかという問題であった。通常の場合であれば、銀行は流通している銀行券の一定比率の兌換準備金を用意しておけばよい。ところが国際収支が赤字のときには、海外へ金銀貨を支払うために銀行へ兌換請求が殺到し、兌換準備金が払底してしまうという問題が生ずる。

ステュアートが提示した解決策は、外国からの長期借入である。銀行は、国内で銀行券を貸し付けたときに担保としたものを、こんどは外国から借り入れるために担保とすることができる。ステュアートは、この外国からの借入が、期間を特定しない長期借入でなければならないと考えた。なぜなら、鑄貨不足がすぐに解消されないとすれば、「もし〔長期〕貸付ではなく〔短期〕信用の更新に頼るとすれば、この信用が再度返済によって解消されるときがくれば、いつも同じ困難が再び生ずることになる」(Ⅲ 221/訳272, []内は引用者)からである。

ステュアートによれば、1762年のスコットランドの為替危機のときに、スコットランドからイングランドへ50万ポンドの貨幣が流出した。このときスコットランドで危機の原因として主張されたのは、銀行が信用を与え過ぎたために過剰発行された銀行券が流通界をあふれて兌換請求のために銀行へ還流し、その結果、鑄貨がイングランドへ流出した、という説明であった。ステュアートは、この見解を強く批判する。スコットランドからイングランドへ鑄貨が流出したのは、銀行券が過剰発行されたためではなく、対外債務のやむを得ない返済のためであった。そして国外へ貨幣が流出した結果として、国内に流通する貨幣が不足し、そのために銀行券を追加発行する必要が生じたのである。つまり、銀行券を過剰発行したために鑄貨が海外へ流出したのではなく、逆に鑄貨が海外へ流出したために銀行券の追加発行が必要になった、というのがステュアートの見解であった。ステュアートが、銀行券の過剰発行が為替危機の原因ではないと強く主張したのには大きな理由があった。というのは、もし為替危機の原因が銀行券の過剰発行にあったとすると、土地担保発券銀行による銀行信用の大量供与というステュアートのもっとも基本的な主張の根幹が揺らぐことになりかねなかったからである。

では、為替危機のときの銀行の行動に誤りはなかったのだろうか。ステュアートは、銀行が信用を供与したことは正しかったが、すぐに兌換請求が来ることを予想して、支払いのためにイングランドから資金を借り入れる準備

をしておくべきだったと言う。

「銀行は求められた信用を供与するという正しい処置をしたのである。しかしその際に、こうした債務返済のすべての負担が銀行に降りかかってくると予想をたてておけばよかったのである。その返済負担能力がないのであれば、銀行はスコットランドの流通の必要を充たしたあと、自分たちが与えた信用に対する利子をイングランドで抵当にして、紙券が還流したら、紙券に対する支払いをするために、ロンドンでその利子を支払って借り入れる資本を準備しておくべきだったのである。」(Ⅲ 253-4/訳294)

この操作によって、スコットランドの銀行が損失をこうむることはないはずであった。ステュアートは、銀行がロンドンから資金を借り入れたとしても、「それによって銀行が負担する費用は、銀行が貸し付ける人々から残らず利子を受け取るならば……その利益を帳消しにしてしまうほど銀行の負担になることはありえない」(Ⅳ 340/訳666)と述べている。

さらにこの操作には、次のような国民的利益がともなうはずであった。

「総じて自国の対外債務を外国の私的債権者の返済請求に任せておくよりも、自国の銀行によって支払ってもらうことは、1国にとってこのうえない利益である。なぜなら、銀行が債務の返済をする場合には、その国は債権者が元本を請求できない長期債による方法で返済することになると私は思うからである。これに対して、私人が外国人に対する債務者の場合には、元金はいつでも請求することができ、しかも突然に予期しない返済請求があると、その国は窮地に陥るからである。」(Ⅳ 254/訳295)

つまり、債権者がいつでも元金の返済を請求できる短期資本を、スコットランドの債務者がロンドンから直接に借り入れる場合には、借り入れた元金の返済を突然に請求されることがありうるのに対して、スコットランドの銀行がいわば金融仲介役となって、ロンドンの債権者から資本を借り入れてスコットランドの債務者へ貸し出す場合には、利子さえ支払っていればロンドンの債権者が元金の返済を請求できない長期貸付を利用できるというのであ

る。ステュアートは、短期資本の急激な国外流出が金融危機を引き起こすことを回避するために、スコットランドの土地担保発券銀行が国外から長期資本を借り入れて国内に安定した長期信用を供与すること期待したのである。そしてステュアートのこの構想を忠実に実行しようとして倒産したのがエア銀行であった。

3 エア銀行の倒産とスミスのステュアート信用論への批判

スミスは、『国富論』第2編第2章で、エア銀行が、さまざまな方法によって放漫な貸付を行ったことについて詳細に説明している。同行は、キャッシュアカウントを放漫に与え、また「手形の割引では、真正手形と融通手形をほとんど区別せずにすべて同じように割引いた」結果、他の銀行が融資をやめようとしていた融通手形までもがこの銀行に流れ込むことになった。さらにエア銀行は、長期の土地担保貸付を行った。「この銀行の公言された原理は、何か適当な担保があれば、土地改良のように収益がもっとも緩慢で遅い改良に使用される全資本を貸し付けることであった。そのような改良を促進することが、銀行設立の公共精神にあふれた主要目的であるとすら言われたのである。」(WN,73/訳484) この原理は、すでに述べたステュアートの土地担保発券銀行の原理にほかならない。

エア銀行が放漫な貸付によって大量に発行した銀行券は、流通界が容易に吸収できる額を超えていたために、金銀貨との兌換を求めて銀行へ舞い戻った。大量の銀行券が兌換のために還流し、エア銀行は空になった金庫を補充するために、ロンドンから金銀貨を借り入れなければならなかった。その方法は、次のようなものであった。

「この銀行の発足当初、ある人々は、同行の金庫がたとえどんなに早く空になろうと、紙券の貸付を受けた人々の担保をもとに資金を調達するというこの方法によって、容易に金庫を補充することができるだろうという見解を

いただいていた。」

つまりエア銀行は、ステュアートが提案したように、スコットランドで貸付をしたときの担保をもとにしてロンドンから長期の借入をしようとしたのである。しかし結果は、ステュアートの予想とは大きく異なっていた。スミスは言う。

「人々は経験によって、この資金調達の方法がかれらの目的に応えるにはあまりに遅く、またもともと中身が不足していたちまちま空になってしまう金庫を補充するには、ロンドン宛の手形を振り出し、期限が来たら累積した利子と手数料を加えて同地宛の別の為替手形によってそれを決済するという便利だが破滅的な方法以外にはないということをまもなく確信するようになったと思う。」(WN,76/訳487-8)

要するに、エア銀行は、低利でしかも利子さえ支払っていれば元本の返済を請求されない長期資金を当初期待したほどにはロンドンで借り入れることができず、それに代わって、短期の為替手形を振り出すという方法によって高利の資金を借り入れざるを得なくなったのである。エア銀行は、為替手形の支払い期限が来ると、元金の返済と利子支払いのために新たな為替手形を振り出し、この操作を続けることによって、債務を急速に拡大していった。

その結果、金利の大きな逆ざやが生ずることになった。スミスは、エア銀行が創業後2年あまりの間に80万ポンド以上の銀行券を貸し出したと推定している。その貸出金利は5%であった。そして同行が閉鎖したときの銀行券流通高は20万ポンドにすぎなかった。つまり流通必要量を大きく上回る銀行券を過剰発行したのである。そして同行は兌換請求に応ずるためにロンドン宛の為替手形をたえず振り出し続け、閉鎖したときには60万ポンド以上を8%を超える金利と手数料を払って借り入れる状態に陥っていた。こうしてエア銀行は、貸出金利5%と借入金利8%との大きな逆ざやによって巨額の損失を被ることになったのである。

また、エア銀行が資金の長期借入に成功した場合にも、損失を出すことに

変わりはなかった、とスミスは言う。「貨幣を貸してくれる人々を探し出すために代理人を雇い、それらの人々と交渉し、しかるべき借用証書または譲渡証書を作成する費用はすべて銀行の負担にならざるをえなかったのがあって、銀行の勘定残高はひじょうに明白な損失になったのである。」(WN, 76/訳488)

スミスは、このような金利の逆ざやによる銀行の大きな損失に加えて、かりに銀行が利益を得られたとしてもスコットランドの国民経済全体として「非常に大きい損失を被ったにちがいない」と指摘する。この操作は、エア銀行を、スコットランドの国全体に対する「一種の一般的貸付局 (a sort of general loan office)」に仕立てたにすぎず、「借りたいと思った人々は銀行にお金を貸した私人に申し込むかわりにこの銀行に申し込んだにちがいない」。ところが、個人が借り手に直接に貸し付ける場合と、銀行が仲介して貸し付ける場合とでは、貸し付けられる総額に変化はなかったが、借り手の性格は大きく異なることになった、とスミスは言う。

「私人が、自分で知っており、まじめで儉約的な行動をすると信ずるだけの十分な理由があると思う少数の人々に貨幣を貸し出す場合と比べて、500人もさまざまな人々に貨幣を貸し付ける銀行の場合は、重役たちがその大部分の人々をほとんど知らないのだから、いっそう思慮深く借り手を選択しているとは言えないのである。……銀行の債務者たちは、大部分が誇大妄想的な投機的企業家であって、融通為替手形の振出人でもあれば逆振出人でもあったと思われる。……したがって銀行のこの操作が成功したとしても、国の資本をほんの少しも増加させないで、その大部分を思慮に富んでいて利益のある事業から、思慮を欠いた利益のない事業へと移すだけであつたであらう。」(WN, 77-78/訳489-90)

スコットランドの銀行は個人投資家に比べて債務者を審査したり監視したりする能力が著しく劣るために、金融仲介業務を通じて、堅実で優良な借り手よりも投機的事業を行う質の悪い借り手を増やす結果になったのである。

今日用語で言えば、借り手と貸し手との間の情報の非対称性によって逆選択が生じたことをスミスは洞察したと言えるであろう。こうして、ステュアートが構想し、エア銀行が実行に移した土地担保発券銀行の金融仲介業務は、銀行自身の損失だけでなくスコットランド国民経済にとっても大きな損失を生みだす結果に終わったのである。

ステュアートの原理によれば、スコットランドの土地担保発券銀行は、ロンドンから長期資金を借り入れてスコットランドの債務者に長期信用を供与し、それを通じて、借入金利と貸出金利の利ざやを稼ぐとともに、短期資本の急激な国外流出を防止する社会的役割を果たすはずであった。しかしスミスは、その原理を実行しようとしたエア銀行が、金利の逆ざやで巨額の損失をこうむり、しかも投機的な企業家の債務者を増やすことによって国民経済にも損失を与えたことを明らかにしたのである。

スミスはエア銀行が倒産に至る経緯を説明したあとに、エア銀行や他のスコットランドの銀行の業務に影響を与えてきた理論として、ジョン・ローの土地担保発券銀行の構想をあげている。

「有名なジョン・ロー氏の意見は、スコットランドの勤労が、それを雇用する貨幣の不足のために衰退しているというものであった。氏は、この貨幣の欠乏を救済するために、国のすべての土地の全価値額まで紙幣を発行できるとかれが想像したように思われる特別な種類の銀行を設立することを提案した。……紙幣をほとんど無制限に発行できるという考えが、いわゆるミシシッピ計画の真の基礎であった。……ミシシッピ計画の基礎となった諸原理は、ロー氏が初めて自分の計画を提案したときにスコットランドで出版した貨幣と貿易に関する論文の中で、氏自身によって説明されている。その著作および同じ諸原理に基づく他の諸著作の中で提起された壮大ではあるが幻想的な考えは、いまなお多くの人々に感銘を与え続けており、スコットランドやその他の地域で最近苦情の種になっている銀行業のあの行き過ぎに、おそらく一部は影響を与えたであろう。」(WN, 78-79/訳490-492)

ここで注目したいのは、「同じ諸原理に基づく他の諸著作」とは誰の著作を指すのかという点である。ジョン・ローには一冊の著書しかないから、ローの別の著作ではない。土地担保発券銀行の設立と、銀行券の発行による勤労の拡大を提案した人物、そしてローの諸原理に共感と支持を表明した人物といえば、ジェームズ・ステュアートをまず考えることができる。ステュアートの名著『経済の原理』が出版されたのが1767年、そしてエア銀行が営業を開始したのはその2年後であった。おそらくスミスはエア銀行の営業方針に、ジョン・ローだけでなくステュアートの影響があったと推測したのであろう。少なくとも、エア銀行の営業方針は、ローとステュアートの原理に忠実に沿ったものであった。それゆえ、スミスがエア銀行の破綻の原因を説明して、銀行のあるべき貸出政策を明らかにするためには、ステュアート信用論を批判することが必要だったのである。

4 む す び

スミスは、1760年代の『法学講義』では、銀行券の兌換制維持と銀行間の自由な競争によって金融市場の安定性が維持できるという楽観的な見解を抱いていた。しかし76年の『国富論』では、銀行の自由競争の意義を主張するだけでなく、金融システムの安定化のために必要な二つの条件をつけ加えた。その一つは、銀行に対する法的規制である。スミスは、1760年代前半の為替危機のあとに制定された1765年法に盛り込まれた選択条項禁止と少額銀行券発行禁止を『国富論』では明確に支持する。もう一つは、銀行の健全な経営を維持するためにとられるべき貸出政策の提示である。スミスは、銀行の貸付が商人や企業家の手元現金に限定されるべきであり、流動資本の大部分や固定資本には貸し付けるべきではないという原則を主張する。そしてこれを実現する具体的な貸付方法として、手形割引では真正手形だけを割引引いて空手形（融通手形）を割引引いてはならないこと、キャッシュアカウン

ト（保証人つき当座貸越）は短期貸付に限られるべきこと、流動資本や固定資本を対象とする長期の担保貸付をしてはならないこと、を主張した。『国富論』で示されたこのような貸出政策は、スミスがエア銀行の倒産の原因を考察したことから導き出されたものであった。

そしてこれらの貸出政策のうち、流動資本や固定資本を対象とする長期の担保貸付をしてはならないという点は、ローやステュアートの土地担保発券銀行の構想と真っ向から対立するものであった。スミスは、実際に、エア銀行や他のスコットランドの銀行がローやステュアートの理論の影響を受けていると判断した。そこでかれは、エア銀行の倒産の原因の解明を行いながら、ステュアートの原理への理論的批判を行ったのである。

ステュアート自身が認識していたように、土地担保発券銀行の最大の問題は、国際収支が逆調のときに、銀行券の兌換請求に応ずるために、海外から低利で長期の借入れをしなければならぬとことにあった。それが十分可能であると主張したステュアートを、スミスはエア銀行の破綻の事実をもって批判し、さらにたとえ海外からの低利の借入れができるとしても、銀行は十分な審査能力を欠いているために投機家へ貸し付けることになると批判したのである。

【付記】

本稿は、2000年11月12日に経済学史学会第64回大会（一橋大学）で報告した「アダム・スミスの金融規制論」の報告要旨の主要部分に加筆したものである。

【引用】

アダム・スミスの著作からの引用はすべてグラスゴウ版の全集による。略記法も同全集に準拠した。ただし『国富論』は、第2編第2章のパラグラフ番号と中公文庫版のページ数を併記してある。またJ.ステュアート『経済の原理』は、全集版（Kelly reprint, 1967）と邦訳のページ数を併記した。

【参考文献】

- 岡本恵也 [1990], 「スミス信用論の基本的構想」『熊本商大論集』36(3)。
 大森郁夫 [1996], 『ステュアートとスミス』ミネルヴァ書房。
 川島信義 [1972], 『ステュアート研究』未来社。
 ——— [1976], 「アダム・スミスの信用論」経済学史学会編『「国富論」の成立』岩波書店。
 小池田富男 [1992] [1993], 「貨幣と信用の近代経済思想(1)(2)」『流通経済大学論集』27(2), 28(1)。
 小林 昇 [1986], 「ステュアート信用論の構造」大東文化大学『経済論集』41, 小林 [1988] 所収。
 小林 昇 [1988], 『小林昇経済学史著作集 第X巻——J.ステュアート新研究』未来社。
 佐藤有史 [1999], 「アダム・スミスと真正手形学説」『三田学会雑誌』92(1)。
 竹本 洋 [1990a] [1990b], 「D.ヒュームの『政治論集』にかんする試論(1)(2)」『大阪経大論集』196, 197。
 ——— [1995], 『経済学体系の創成』名古屋大学出版会。
 ——— [1998], 「1760年代のスコットランドの為替危機をめぐる一文書とJ.ステュアート」『経済学論究』52(1)。
 ——— [1999], 「スコットランドの為替危機をめぐるA.スミスとJ.ステュアート」『経済学論究』52(4)。
 中村廣治 [1963-65], 「スミス貨幣・信用理論の研究(1)―(4)」大分大学『経済論集』15(1・3), 16(1), 16(2・3), 16(4)。
 ——— [1985], 「先行諸学説とマルクス信用論」浜野俊一郎・深町郁彌編『資本論体系6 利子・信用』有斐閣。
- Gherity, J. A [1993], 'An Early Publication by Adam Smith', *History of Political Economy*, 25(2).
 ——— [1994], 'The Evolution of Adam Smith's Theory of Banking', *History of Political Economy*, 26(3).
 Hume, D. [1932], *The Letter of David Hume*, edited by J. Y. T. Greig, vol. ii.
 Ross, I. S. [1995], *The Life of Adam Smith*, Oxford: Clarendon Press. 篠原久・只腰親和・松原慶子訳『アダム・スミス伝』シュプリンガー・フェアラーク東京, 2000年。
 Steuart, J. [1767], *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*. 小林昇監訳『経済の原理—第3・第4・第5編—』名古屋大学出版会, 1993年。

Adam Smith's Criticism of James Steuart's Theory of Banking.

Satoshi Niimura

This paper considered why and how Adam Smith criticized James Steuart's theory of Banking. In *Lectures on Jurisprudence* Adam Smith had a quite optimistic view about the stableness of banking system. But after the financial crisis in Scotland in 1760s and 1770s, especially the bankrupt of the Ayr Bank in 1772, Smith changed his early optimistic view of banking system. In *Wealth of Nations* Smith criticized Steuart's theory of banking, because Smith thought that its influence might be one of the major causes of the bankrupt of the Ayr Bank and the financial crisis in Scotland in 1772.